
桜楓姫譚 《おうふうきたん》

栗田隆喬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おうふうきたん
桜楓姫譚

【Nコード】

N4343E

【作者名】

栗田隆喬

【あらすじ】

薬草採りの少女サワネが霧深い山々、太古の巨木生い茂る森で出会った神秘。和風な世界観で繰り広げられる連載ファンタジー。

第一回

登場人物紹介

Illustration 長月 晶

>i2430—410<

サワネ 本篇の主人公。薬草採りを生業とする少女。

>i2431—410<

おばば 村の薬師。治療の腕は一流。

>i2432—410<

青年 尾根から滑落していた謎の青年。サワネに助けられる。

>i2433—410<

ヨヘイ サワネと同じ年ぐらいの少年。すばしこい。

第一章

霧が流れて行く。白く覆われていた急な斜面があらわになった。

尾根伝いに伸びる獣道。灰色の麻衣あさいろのきぬを身に纏い、背負子しょいこを背にした少女が一人歩いていた。

年の頃は十二、三だろうか。日焼けした顔。ぱっちりとした目。長く伸びた黒髪。額には四角い渦巻き模様を白い糸で刺繍した頭帯。腰の革帯には山刀と竹筒が動かないように留められている。くずれやすい石で不安定な小道を軽々と、まるでヤマノシカが跳ねるように歩んで行く。

少女は立ち止まった。強い風でよじれた低木の間に、露のついた丸く包まった芽がいくつか顔をのぞかせている。ナビゴケ。熱さまし、胃腸薬、そして湿布にすれば傷薬にもなった。かがむようにして赤く色づいた新芽を半分ほど手早く摘むと、小さな布に折り畳んだ。腰の布袋にそっとしまい、再び歩きだす。

>i2428—410<

illustrated by 長月 晶

少女はサワネと呼ばれていた。タガシ村から離れた山ノ上の小屋に一人で暮らしている。

山々を渡り歩いては薬草を採って村の薬師のおばばに納め、代わりにヒエや野菜を貰い受けていた。

サワネは尾根を上り、小さな頂きにたどり着いた。腰から竹筒を取り、口に当てる。ひとくち、ふたくち、喉を潤してから尾根向こうに目をやると、稜線から崩れた茶色の斜面の中腹に白っぽいものがあつた。目をこらす。人が倒れていた。動く気配はない。

下の谷間から霧が上ってきて、再びあたりを包んでいく。

サワネは竹筒に栓をして腰に戻し、身を翻すと駆けだした。

体も溶けてしまいそうな濃い霧の中を、尾根伝いに駆け上がった行く。そのまま山頂まで一気に登ってから、注意深く足元を調べ始めた。見晴らしがよければ目で方角を確かめることもできる。だがこの霧では知識と経験、そして方向を見極める己の感覚だけが頼りだった。

サワネが歩き始めた尾根の稜線は細く、左右は断崖になっていた。積み重なった礫は簡単に崩れて斜面を滑り落ちると視界から消えて行く。

それでもサワネは歩みをゆるめることなく、霧の中に浮かぶ剣の刃渡りのような細い道を下り始めた。

濃霧がまた一瞬晴れた。のぞき込むようにすれば左手の斜面の中ほどに、先ほどの人影が見えた。額から顔にかけては流れる血に染

まっている。

サワネはそれまで歩いていた尾根から一気に断崖を下り始めた。砂煙を巻き上げ、礫と砂ばかりの斜面を滑るようにして下っていく。中腹で器用に止まると、ゆっくりと人影に近づいていった。

まだ若い少年のような顔立ちの男だった。鎧を身に纏い、腰には剣を携えている。サワネは稜線を見上げた。尾根を歩いていて滑落したのだろう。砂ばかりの崩れだが、ここだけ大きな岩が残っていて引っ掛かったらしい。

「だいじょうぶか？」

意識はないらしく男の答えはかえってこなかった。それでも、息はある。

首を下手に動かさないように注意しながら、傷の具合を確かめる。かすり傷は無数にあった。ひとつ、額に大きく裂けるような傷があってそこから派手に出血していた。血は滲んでいるが黒っぽく、実際はほとんど止まりかけている。ここの岩に落ちた時にぶつけたのだろう。

サワネは腰から竹筒を取り出し、指先に水を垂らした。水滴で紫色の唇を湿らせてやると、若い男はうつすらと目を開いた。

「しっかり！」

生気のない目でサワネを見つめ、口をかすかに動かした。

「なに？」

「……書……を」

喘ぐようにそう言うと、再び気を失ってしまった。

サワネはまず額の傷を水で洗った。胸元から長めの布を取り出し、傷口に当てると後ろできつく縛る。それから小刀を取り出し、重い鎧をはがしはじめた。白の鎧板を固定する革の留め具を切り外していく。

続いて男の剣を腰から外すと刀身を引き抜いてみた。色鮮やかで優雅な模様を織りなす組み紐で滑り止めされた柄の感触。研ぎ澄まされた刃。ずしりとした鋼の重量。サワネは躊躇もせずはその刀を

斜面に突き刺すと、空になった鞘だけを男の頭の横へとあてがった。自分が身につけていた腰の山刀も抜いて、やはり空の鞘をあてがう。背負子から縄を取り出すと、首から頭にかけて二つの鞘をちょうど添え木のように縛り付けた。

サワネは抜き身の剣と引き剥がした白い鎧、そして自分の山刀に背負子を岩の陰にひとまとめにすると、男を背負い、再び霧に包まれはじめた斜面を滑るようにして下りはじめた。

第二回



「お婆ば、開けてくれ。おらだ、サワネだ」

月に照らされた古屋の戸を叩く。動きがなかったので、さらに強めに叩くと、やがて明かりが灯った。うっすらとした光が建具の間から漏れてくる。光の動きで、誰かが戸口へと近づいてくるのが分かった。

「あいあい。……ったく、こんな時間になんだいよ。またケガした動物でも拾ってきたんかい」

つかえ棒が外され、木の引き戸がガタガタ音を立て横へ滑った。ロウソクを手にした老婆が歯の抜けた口を大きく開き、わざとらしくあくびをする。

「老人は朝が早いんだに、こんな夜更けに起こされると眠りが浅くなって困るわ。今度拾ってきたのはトラか？ それともクマか？」

目を細めながらサワネを見た老婆は、サワネに背負われた若い男に、今度は大きく目を見開いた。

「なんと、怪我人じゃないかい、サワネ。一体どこで……」

「ナナサワクズレの途中の岩棚に引っ掛かってた。尾根道から落ちたみたい」

ため息をついて老婆は首を振った。

「はたまた、一体なんちゅう道を……。とりあえず、動かさんようにゆっくり降ろせや。フム……」

老婆は男の着物をはがし、体を調べ始める。

「ほう、ちゃんと教えた通りに首は動かんようにしたか」

「うん。……で、助かるか、お婆ば」

老婆はうなった。

「額のほかには傷は無さそうだの。だが、頭の傷は後からくること

もある。なんとも言えんなあ」

「そうか……」

サワネはかがんで腰の袋から布にくるんだ薬草を取り出し、老婆に差し出す。

「ツヅマツとナビゴケの新芽。それに、ハナミドロの根っこ。お願いだ、おばば。この人を助けてやってよ。お代、これだけあれば足りるだろう？」

ちらっと目をやってから小さくうなずいた。

「やるだけやってみるが、死んでしまうかもしれないぞ」

「生き死には、山の神様が決めることだもの、どうしようもないさ……。でも、できる限りのことはしてくれよ、お願いだ」

おばばはチョツと舌を鳴らしながら薬草を受け取った。

「仕方ないの」

「良かったあ」

「しっかしまあ、お前さんも物好きよの」

はにかむような笑顔を浮かべながらサワネは立ち上がる。

「なあ、おばば。おら、山刀と背負子を山に置いてきたんだ。この人が着てた鎧と剣も。これから取りに行くよ」

「なんと。剣に鎧なんぞ身につけていたんかい、この青二才は。よく見りゃ首を支えてるのは剣の鞘……。すぐに気づかんとは、いやはや。年を取ると目も悪くなって困るの。……この鞘も、相当悪くないもんだの。ふうむ」

男を見つめるおばばの眉間に皺が増えた。

「武人とは、こりゃとんだ拾いもんだの。厄介事が転がり込んできたわい。……それで、サワネや。こやつが着ていた鎧はどんなだった？」

「うーん……どんなって言われても」

「白っぽかったか、赤かったか、黒かったか……」

「白かった」

「それじゃ胸のあたりに何か印が描かれてなかったかの？」

「あつた。ヌマヤエノハスの花」

「都の衛士だね……」

おぼばの目が険しくなる。

「……んじゃ、おら行ってくるな」

「サワネ。いくら月明かりがあるからってこんな夜中には行かせられんな。こやつが衛士なら余計にの。今夜は得体のしれんものが山に潜んでおるかもしれんからな、危険じゃ。休んで、明日の朝早くにお行き」

サワネはしばらく思案した。

「……分かった。おぼばがそういうんなら」

「それと、悪いが今は手をかしてくれ。こやつを上の葉置きに担ぎあげるんじゃ。ちよつと待っておれ」

おぼばはロウソクを手に、一本丸太に切れ込みを入れただけの階段を軽々と登っていく。しばらく上の方でガタガタ音がしてから、おぼばの顔が覗いた。

「来い。そやつを背負ってな。間違っても乱暴に動かすでないぞ」

第三回

サワネは男をかつぎ上げると、丸太の階段を登った。上の階は葉置きになっている。下から伸びた太い柱の間に棚がいくつも作られ、さまざまな乾燥した草や木の根っこ、小動物の干物などが粉末になって、広げた紙の上に置かれていた。古い本が積み重ねてその脇に置かれている。サワネが男を降ろそうとすると、

「そこじゃない、こっちじゃで」

おばばが指さしたのは縄梯子だった。そのまま口にロウソクを咥え、するすると昇って行く。残されたサワネがどうしようかと思案している、上から一本の帯が落ちてきた。

「なにをぐずぐずしとる。そやつをくくりつけてさっさと昇って来い」

男のからだがずり落ちないように赤ん坊を背負うように帯で結んでやると、サワネは揺れて不安定な縄梯子を危なげなく上りきった。上には、ほとんど屋根に近い梁の陰にわずかな床面があった。もの入れの小箱が置かれているほかは何もない。背丈のないサワネでも屋根が迫っていて立ち上がれず、中腰でいるのがやっとだった。

「いいか、そこへゆっくり降ろせや。そおっと、そおっとな」

帯を解いて男を降ろして寝かすと、おばばは首を留めていた鞘を外すように言った。

「なんとかここで傷の手当をしてやれそうだの。まずは降りて湯を沸かそう」

おばばはそう言う、するすると縄梯子を降りた。サワネも続く。下の囲炉裏端でおばばは振り返った。

「サワネ。このことは誰にも秘密だでに。いいか？」

黙ってうなづく。

「水を汲んできておくれ」

サワネは土間の水瓶から柄杓ひしゃくで鉄鍋に水を汲んだ。囲炉裏に戻る

れば、おばがおきの灰をかき回している。火種を取り出すと、その上に薄い木の皮を置いて口をとがらせ、ふうっ、とひと吹きした。赤く輝いたおきから白っぽい煙がうっすらと出ると、やがて炎がポツと上がった。そこへさらに木皮を数枚置いてから小枝を積み重ねる。細い煙を上げながら木皮を舐めるように炎が燃え広がった。火はどんどん大きくなって、やがて小枝も燃え始める。

おばは小さめの薪を囲炉裏に加えると鉄鍋を火にかけた。

「さっそくお前さんがとってきた薬草が役に立つわい」

赤い新芽を奥から持ってきた石の薬臼に入れると、ゴリゴリ音を立てながらすりつぶしていく。臼の底には汁がたまって、新芽のもつ青草の香りが広がった。

湯が沸くとおばは手ぬぐいを濡らしてから臼に浸しナビゴケの汁を染み込ませた。立ち上がると、柳李こしりからきれいにたたまれた古い男物の着物を取り出す。さらに数本の手ぬぐいを手にすると丸太階段を昇り始めた。

「サワネや、その鍋をもって来ておくれ。湯はこぼさんようにな、火傷やけどするぞ」

そういつてロウソクを手の上に上へ行ってしまった。

サワネは鍋の取っ手を布でくるんで火から降ろした。暗くてほとんど見えない丸太階段を勘だけで昇ると、続いて片手に湯の入った鍋を持ったまま、器用に縄梯子をのぼって行く。上ではおばが、男の額から傷を覆っていた布をはがしているところだった。

「鍋はそこに置いてくれの。手ぬぐいを湯で湿らせてくれ。まずは汚れをふきとらにゃならんからな」

サワネは鉄鍋の湯に手ぬぐいを浸して、やけどをしないように注意しながら絞った。湯気のアがる手ぬぐいをおばに手渡す。おばは男の額にこびりついた血を丁寧に拭いはじめた。

「なんだかんだ言っても、助手がいると助かるわい……」

おばは汚れをふき取った手ぬぐいをサワネに返すと、青汁を染み込ませた手拭いを額の傷口にあてがい、別の手ぬぐいを上からぐ

るぐると巻いた。

「額の傷はこれ以上何もできんな。……あとは体でも拭いてやるか」
サワネが新しい手ぬぐいを手渡す。

「ふん。よく見りゃなかなかの美丈夫じゃないかい。このまま死なすにはもったいないの」

「縁起でもないこと言わないで」

「からだも立派よのお。死んだおじじの若いころみたいじゃ。ますます惜しくなってきたぞ」

おばばはニヒヒヒヒ、と笑いながら、男の肩の辺りの衣を脱がし、体を拭いていく。手ぬぐいを替え、さらに衣を脱がしながら首、胸、腹と徐々に下の方へと拭いていった。やがて腰帯に手をやるとおばばは顔を上げた。

「……時にサワネ。もう湯は十分で、手ぬぐいを置いたら鍋をもつてお前さんは先に下へ降りといで」

「えっ……。もういいのか」

「ああ、十分じゃ、十分。さっさとお行き」

サワネが葉置きの階に戻ると、しばらくしてからおばばが、使い終えた手ぬぐいと男の着物を手に降りてきた。

「持っておれ」

手にした着物をサワネに渡すと、おばばは棚の間にある暗闇の中でござそと音を立てた。すると、さっきまで垂れ下がっていた縄梯子が上にするすると巻き上げられていく。

「さて、これで終わりじゃ。囲炉裏端にでも戻ろうかの」

おばばは土間から鉄鍋をもってきて、囲炉裏の火にかけた。少し弱まった火に薪をくべる。

「サワネ、ご苦労だったの。座って一旦落ち着きな。粥をあっためてやるから、お食べ。山に背負子も置いてきたんじゃあ、どうせなにも口にしてないだろ？」

「そういえば……忘れてた」

恥ずかしそうにサワネは笑う。

「でも、山の中だと、いくら歩いてても不思議と腹が減らないんだ」
お婆は鼻を鳴らすと火を挟んで斜め向かいに座った。

「ふん。山人はみんなそういうよ。山の神が腹を満たしてくれるから、腹が減らないとな。だが、それは気のせいだでに」

「違うって、お婆。本当に山にいる間は腹が減らないんだ」

そういつた瞬間、サワネの腹がきゅう、と鳴った。火の具合を見ていたはずのお婆と目が合う。きまり悪そうにサワネは笑った。

「ほれみろ。人間、だれでも腹が減るもんだって」

「違う。山の中だと干し飯に小魚だけでも十分なんだ。本当に、腹が満たされて、どうしても食べたいって感じがなくなるんだ」

「そういうもんかの」

しばらくして鍋からコポコポと音がし始め、美味しそうな匂いが漂ってきた。お婆は匙でいったん鉄鍋をかき回すと、粥を木製の椀によそう。

サワネの腹が再び、大きな音を立てて鳴った。

「ふふん。なんだかんだ言うても、からだは正直よの」

「だから……」

湯気を立てた椀がサワネの目の前に置かれ、箸が渡された。

「……頂きます」

お婆は黙ってうなずいた。

第四回



目が覚めた。あたりはまだ薄暗い。すでに隣のおばばの床は、か
らになっている。

サワネは葉置きにあがった。思った通り縄梯子が降りている。上
にあがると、おばばが若い男の額を覆う手ぬぐいを取り替えている
ところだった。

「起きたか、サワネ」

「おばば、おはよう。……様子はどう？」

男をじっと見つめるおばばの顔が陰った。

「熱が出てきた。こりゃ、そうとう厳しそうだの。今夜か明日あた
りがヤマかもしれん」

「そう……」

サワネはうつむきながら呟く。

「おばば。おら、とりあえず戻るよ。置いてきた山刀も気になるか
ら」

「いいかい、サワネ」

おばばが顔を上げた。暗闇の中、ロウソクの光をうけた二つの目
が、サワネをじっと見つめている。

「この男のことは村のだれにも言っちゃいけないよ。だれにもね。
それと、こやつ鎧や剣は捨てておしまい。分かったかい」

「……うん」

「山にいる間は夜旅も避けるんだよ。今夜の満月は特に。森が騒が
しい」

「わかった」

「囲炉裏の横に握り飯がある。もってけ」

「ありがとう、お婆」

サワネは縄梯子を下った。笹の葉に包まれた握り飯を腰袋に詰めると、そっと裏の戸口を開き、夜明け前の薄明かりへと駆け出した。



村の周りの雑木林を抜ける小道の向こうから人がやってきた。サワネが素早く茂みの中に隠れようとする、目ざとく見つけたのか声をかけてくる。

「サワネっ！　そこにいるのサワネだろ！」

ため息が漏れてしまう。サワネは舌を鳴らして小道に戻った。

「早起きはいいいことあるって言うけど、本当だな。まさかサワネに会えるなんて思わなかったよ。今朝はついてるなあ」

小柄な少年が笑顔でサワネのもとにとんできた。まるで迷子になって飼い主を見つけた子犬のようだ。

>i2429—410<

illustrated by 長月 晶

少年はヨヘイと言った。年はサワネとそれほど違わないが、ヨヘイはひとまわり体が小さかった。それに力もない。だが、やたらすばしこかった。勘も冴えてるようで、サワネの隠れをなぜか見つけてしまう。野に住む獣を欺くほどの隠れなのにヨヘイには見破られてしまうのがサワネには面白くなかった。

薄暗闇の中でヨヘイの黒い目がじっと見あげている。このところ村に降りるたびににかと声をかけられるのもサワネは嫌で仕方なかった。眉根を寄せ腕組みしながら近づくヨヘイを見下ろし、睨みつける。

「おはよう、ヨヘイ。なんか用？」

「おはよう。いや、べつに用ってほどのことはないんだけどさ……」

「じゃ、さよなら」

歩きだそうとするサワネをとうせんぼでもするようにヨヘイが横へ動いた。

「な、サワネ。村に降りてくるの久しぶりだろ、それでさ、おいら……」

「おら、忙しい。もう山にもどらなきゃ」

「こんな時間に？　せっかく村に降りてきたんだから、もう少しゆっくりして、帰るのはおひさまがのぼってからにしろよ。……薬師のお婆のところにいられないなら、おいらのところにすればいいよ。昨日、子ウサギを何羽も取ってきたんだ、それもおいらひとりだよ。サワネにも見せたかったよ……」

「ごめん。通して」

サワネは歩きだした。ヨヘイはサワネをぼかんと見送る。

「また遊ぼうな、サワネ。今度くる時はそのまえに教えてくれよ。もう少し暖かくなったらさ、ハナイチゴの実、取っておくから。好物だろ？」

「知らないっ」

「サワネ、じゃあなああ！」

ずっとすすんで木立の陰を曲がる。ヨヘイが見えなくなると、サワネは足元の小石を拾った。向こうの木立へ思い切り投げる。また拾って、思いきり投げて、拾っては投げて……。

その手を止め、小石を落とした。あわてて両の手を森に向かって合わせる。

——森の神様、なんかむしゃくしゃしたからって、石なんぞ投げて申し訳ありませんでした。

頭をあげると、はあ、とため息をついてサワネは再び歩き始めた。

第五回

斜面がきつくなるあたりでサワネは獣道にわけ入った。人が使う道はなだらかだったが、急な上り下りを避けるために歩く距離は伸びる。獣道は険しく目立たないが、よっぽど近道だった。

しっかりとした足取りで斜面を登っていくと、タガシ村はとつくに木々の間に隠れてしまった。

白んだ空に照らされて下草や木々の枝振りがぼんやりと見えはじめた。新しい朝に目覚めた小鳥のさえずりが、あちらこちらで聞こえてくる。

しばらく歩くと、うつそうとした木々から霧を通して橙色の光がさしこむようになった。

遠くからは水音が響いてくる。あたりは森深かった。湿った草と木々の香り。大きな岩とゴツゴツした木の根。雪解け水で豊富な流れの沢。緑や赤黄色の苔で覆われた獣道が沢に沿うようにして続いている。サワネはその見えない往来を休むことなく進んでいった。

木漏れ日が頭の上からさしてきた。腹の具合から言ってもそろそろ昼時だろう。サワネは沢へ下った。水しぶきを上げる流れの両脇には岩が積み重なっている。冷たい流れで手を清めてから、緑に苔むした岩の一つに腰掛けると、笹に包まれた握り飯を取り出した。

——いただきます。

ほんのりとした塩味。まぶされたゴマの風味が口に広がった。

米は滅多に口にできない。茶色の米粒を味わうようにして噛んだ。噛めば噛むほどに米は口のなかで甘くなっていく。そのうちにまるで解けるようにして米粒はなくなってしまった。

腰の竹筒で沢の水を受け、一口含むと、次の握り飯を口に運んだ。再びゆっくりと噛む。

ふと目をやると、手が届くほどの石の上に小鳥が舞い降りてきた。黒い瞳でサワネの方を見ながら、その足元の流れに下り水浴びを始

める。頭を下げ、水に全身をくぐらせては羽根を小刻みに動かし、嘴でからだのあちらこちらをつついていた。それから小石に飛び移って全身の羽毛を逆立て体を震わせる。そこへ別の小鳥が飛んできた。二羽は見つめ合い、円を描くように岩を跳びはねてから交替で水に入っては石の上で体を乾かし、それをなんども繰り返した。

サワネがぼんやりとその様子を眺めていると、やがて二羽の小鳥は飛び立った。食事を済ませたサワネも立ち上がり、流れで手を清め、竹筒を水で満たしてから歩き始める。

やがて大きな岩が垂直な崖になって目前に迫ってきた。カエシノイワだ。サワネは一休みしてから、壁面のくぼみや引っかかりを足場として、跳ねるように崖を駆け上がったいく。

カエシノイワの崖を登り切ると、その上は森も切れて平らになっていた。山ノ上と呼ばれ、サワネの住む小屋があった。

わずかばかりの平地は畑になっていた。耕したばかりの土からは点々と小さな緑の芽が列になって顔をのぞかせている。葉草採りに山に入る前、種をまいておいたヤマソバだった。

サワネは満足げに畑をぐるっと一回りすると自分の小屋に向かった。

「ただいま」

引き戸を開ける。暗い部屋に一筋の光が差し込んだ。うっすらと砂埃のかかった小屋の中はがらんとして何もない。特に荒らされてる様子もなかった。カエシノイワぐらしか人の通れる道がないから、山人やまびとでもないかぎり、誰もここを訪れるはずもなかった。

サワネは隅に置かれた行李を開いた。中から山道に備えてツナカズラで結った縄を取り出す。奥の戸棚からは迷った時のために干し飯に干し魚、干した野菜の漬物を取り出して笹の葉に包んだ。

「じゃ、いってきます」

小屋の扉を閉じるとヤマソバ畑の横を通り過ぎ、カエシノイワを下る。

サワネは山へと歩みを進めた。

第六回

サワネの向かったアカノミネは、年中霧に覆われ、強い風の吹きあれる不毛の山だった。山頂付近は砂ばかり。夏になるとわずかな低木や草の茂みがいじけたように地面を這っている。赤茶けた砂や岩がむき出しになった山肌は滑りやすかった。サワネはしばしばこの付近にしか生えない薬草を探しに訪れたが、よほどのことがなければ村人はこないし、人の通る峠道もないので旅人も訪れない。修験や山人でさえも滅多に足を踏み入れない場所だった。

——どうしてあの人、こんなところを通ったんだろ？ 他の道の方がずっと楽なのに……。

サワネは背負子と山刀を隠した岩棚を目指した。尾根は下から強い風と共に霧が吹き付けてくる。麻衣の上着も、頭帯も、そこからこぼれたサワネの黒髪も、霧の粒で白くなっていく。

わずかな幅で右も左も断崖絶壁になったナナサワクズレの尾根道は、あたりがとっぷり霧に包まれると、まるで白い世界にたった一人で浮いているような気分になってくる。

サワネは足を止めた。そのまま横を向いて尾根から一步足を踏み出すと、サワネの姿は霧に消えた。

転がるように滑ってから、くずれやすい砂の斜面に踏ん張りをきかせる。サワネが止まったのはちょうど目指す岩棚の横だった。そこから慎重に足を運び近づいて行く。やがて、あたり雰囲気がこの前とは微妙に変わっていることに気づいた。

岩の陰にまわる。

何もない。

サワネが大切にしてきた山刀、そして男の剣に鎧はもちろん、背負子さえ見当たらなかった。注意深くあたりを探っても、サワネの足跡のほかは何も見当たらない。何者かが突然この岩棚に現れて、そのまますべて持ち去ってしまったようだ。

白一色の薄暗い空を見上げる。異界より訪れる麒麟、竜神、鳳凰など、空飛ぶものの存在はおぼから聞いてはいたが、サワネには彼らがあの荷物に興味を持つとは思えなかった。第一、空からは見つかからない岩陰に隠したのだから。

神仏妖鬼の法力を操る法術師には、空を翔び、一瞬にして離れた場所に現れる者もあると聞いたことがあった。でも、こんなところにわざわざ術を使って、薬草取りの小娘が使っていた山刀や背負子を盗みにくるとは思えない。あの男の剣や鎧にしても、手にした時にかなり質の良いものだとは感じたが、どこにでもある変哲のないものだった。

サワネはしばらく腕組をして考えた。

ふいに霧がさあっと流れて、青空が頭上に広がった。あかね色に染まった沸き立つ雲の間から、陽の光がいくつもの筋となって降り注ぎ、あたりをまぶしく照らす。霧は一気に晴れた。

山の天気は変わりやすいが、ここまで不意に晴れることはめったになかった。橙をした波雲の後ろには夕陽の光を浴びたアカノミネの頂が、赤く燃え上がる炎のように輝いている。

——山の神様が供え物として受け取ってくれたんだな、きっと。

そう思ったらサワネはとたんに納得してしまった。山の神様にはいつも世話になっている。薬草をとらせてくれるのも、無事に山ノ上の小屋へ戻れるのも、あの怪我した男を見つけてさしてくれたのも、みんな山の神様のおかげだ。山刀や背負子を失ったところで、それ以上のものを頂いている。あの男にしても、まだどうなるかわからないが、とりあえずの命は繋いでいるはずだった。

サワネは頂へと頭を下げた。パンパンと手を合わせ、目をつむる。

——山の神様、捧げ物を受け取ってください、ありがとうございます。
います。むにゃむにゃ。

そう唱えて頭を上げると、心の中まですっきり晴れたような気持ちになってくる。サワネの口元には自然と笑みが浮かんでいた。

晴れた時と同じくらい唐突に、山頂が雲に覆われていく。谷から

濃い霧が押し寄せてきて、あたりは再び乳白色に包みこまれていった。

「よしっ」

為すことは為された。そう思ったサワネは再び斜面を一気に下り始める。

「……そういや、新しい山刀を作ってもらえるほどの銭、おらんところにあったっけ？」

そんなことをつぶやきながら。

第七回



山頂付近は裸山のアカノミネでも下ると木々の緑が目立ってくる。霧雨に濡れた葉の上には、水滴の丸い粒が新葉の緑と夕日の橙色を一つに集め輝いていた。その夕日もあつと言う間に西の山脈の裏に沈んでしまう。

サワネは早く村へ戻ろうと、夜道を歩き続けた。円い月が梢の間に煌々と輝いて、急ぎ足のサワネを追いかけてくる。木立や歩みを進める自分の姿が、青白い光で影になり、足元に伸びていた。

ホウホウ、と低いミミズクの鳴き声。サワネは湿った落ち葉を動かすこともなく、静かに歩みを進めていく。やがて獣道は沢の側に沿って下りはじめた。

しばらくすると急に夜風の流れが変わって、水の香りがサワネのもとに届いた。そして、水が滝となって一気に流れ落ちる音も。

おや、とサワネは首をかしげた。

いつも通る小道の近くに滝は無い。それが今夜はすぐ近くに滝を感じる。激しく跳ねる水の音に混ざって風に揺られた木々のざわめきが押し寄せてきた。

迷ったと感じた時は確信の持てる場所まで戻らねばならない。それが山の鉄則だ。

サワネは足を止めた。ずっと追いかけてきた空の月も動きを止める。

目を閉じ、両手を耳にあて集中する。

風に揺れる木々の葉擦れ。ミミズクの声。虫のかすかな鳴き声。左手には沢の流れる水音。蛙が鳴いている。先の方からは宙に舞った水が崩れ、飲み込まれていく滝の音。滝つぼのあたりからは、ぶ

うん、ぶうん、という低い音が聞こえてきた。

ゆっくりと目を開くと、何かが谷の方でぼんやりと光って見える。赤、青、そして金、銀。さまざまな色が混ざり合い、絡み合いながら光っていた。

ゆらゆらとゆっくり明滅しながら漂う光。ホタルの季節には早すぎる。だいいちホタルにはあんなにたくさんのはななかった。

サワネは、魅入られたようにゆっくりと光のもとに向かって歩きはじめた。絡まる木の根を避けながら慎重に獣道を下っていく。滝つぼに近付くにつれて、ぶうん、ぶうん、とあたりの空気を揺るがす低い音が、腹の底にまで響いてきた。

獣道が唐突に切れた。かわりに大音響が目の前から響いてくる。黒い枝の森が終わり、視界がひらけた。そこには見たこともない巨大な滝がそそり立っている。崖の上からは水の塊が轟々と地響きを立てて落ち、月明かりにしぶきが霧になって立ちあがった。滝つぼの中には大きな楓の木が一本、すっと立ち、赤く色づいた枝葉を広げている。滝に打たれても枝がへし折られることもなく、水はすり抜けていくようだった。満月に照らされた枝は風が吹くと左右に揺れ、そこからさまざまな光の珠がひとつ、ふたつとこぼれた。そのたびに、低いぶうん、ぶうん、という音があたりに響く。こぼれおちた光は滝つぼのしぶきと共に吹き上げられるようにして宙を舞い、そのまま月夜へと消えていった。

サワネは魂を抜かれたように茫然と、その光景を眺めていた。

「どうだい？　きれいだろ？」

背後から声がする。はっとしてサワネは振り向いた。

黒々とした岩の上、白い絹衣きぬころもを身にまとった少年が月の光を浴びながら立っていた。鼻筋の通った青白い顔。切れ長の目。黒い瞳がサワネを見下ろしている。長くまっすぐな髪。衣に織られた群青の六甲紋が月明かりにきらきらと輝いた。腰には若草色をした組紐の刀柄。左手には青々としたヤツデの葉を握って肩に担いでいる。

第八回

「あんた……誰？」

「誰でもいいだろ。それよりせっかくだから、この大楓を見ろよ。滅多に見れないぞ、こんなきれいなもの」

そういうと少年は岩を蹴り、ひとつ飛びでサワネの横に降り立った。腰にヤツデの葉を差すと、両手を組み滝つぼのなかの楓を眺めた。

「いつまで見ても飽きないだろ？　いろんな色の光の珠がいくつも落ちてきて……ん？」

少年は急に鼻を鳴らし始めた。サワネの両手首を掴み、顔を近づけるとサワネのからだをクンクン嗅ぎはじめる。サワネは全身がかあつと熱くなってきた。

「な、なににするさっ！」

「お前、人の子か。どおりで少しにおうわけだ。人間くさい」

「は、離せっ！」

「ふふふっ」

少年は顔を離れたが、逆に手首がぐっと引っ張られた。ふわりと浮き上がる感覚。足の裏に土の感触が無くなった。

「はなせっ！」

「それが望みなら手を放してもいいが、するとお前は死ぬぞ、多分」
サワネは足元を見た。文字通り下の方は何もなくなって足が宙にぶらりと浮いている。驚いて足をばたつかせた。

「暴れるな、落ちるぞ」

その一言でサワネは動くのを止めた。恐る恐る目をやると、はるか下には滝つぼと光の珠をこぼす大楓、そして沢の流れがあった。いくつもの峰が小さく見える。風が音を立てて吹き抜けて行くと、からだが揺れ、鷹にさらわれたノネズミのような気がしてきた。サワネは震えながら目をつぶる。

「怖いのか？ 目をつぶるなんて。せつかく宙を舞っているのに、楽しまないとはもったいないぞ」

そう言われ、サワネは無理に片目を開いてみた。暗闇の中に白い雲がたなびいて、煌々と月が照っている。

涼しい風が顔をなでた。両腕をしっかりと握る手の温もり。サワネは深呼吸をしてから両方の目を見開いてみた。前方には満月に照らされた山脈の残雪が暗闇にぼんやりと浮かび上がっている。山のふもとにかけては黒々とした森が広がり、そのあちらこちらに明かりが見えた。そうした明かりのあるところはどこも巨木が頭ひとつ分、周りの木々を追い越して飛び出していた。風に揺れるたび、巨木の葉からは光の珠がこぼれ落ちる。その光がまるでタンポポの綿毛のように風に吹かれて浮かび上がり、空へとただよって行く。サワネのまわりにも、そのようにして舞い上がるいくつもの光があった。「あの木はみんな滝つぼの大楓とおなじさ。いろんなものが木から吸い上げられている。葉からそれがこぼれおちて、風とともにまきあげられて、どこかへと消えて行く……」

顔を上げると少年と目が合った。

「人の子が、大楓を見つけるとはな」

「おら、道に迷っただけだ」

「そんなはずないだろう？」

「ほんとうに迷っただけだ」

しばらく少年は黙ってサワネを見ている。

「わざわざ探しに来たんじゃないのか？」

「あたりまえだ」

「……おもしろいな、お前」

少年は少しずつ高度を下げた。柱のように垂直に切り立った岩の頂上にサワネは降ろされた。立とうとしても足はふるえて力が入らず、へなへたと座り込んでしまった。

森からはいくつもの光の珠がゆらゆらと上がって、二人が立つ石柱をかすめていった。

少年はゆつくりとサワネの脇に降り立つ。サワネはまだ立ち上が
ることもできず、少年を見上げた。

第九回

「あんた……誰？」

「そういうあんたは、誰だい？」

「おら、サワネだ」

「サワネ、か。……それ、あんたの仮の名だよ」

「なんだ、それ？」

「人は名をつけるのが好きだから。なんでも仮に名をつけて、それがずっと昔からそうであったように思い込んでしまう。それが仮名さ」

「それがどうしたのさ」

「あんた、……己の真の名を知りたくないかい？」

「……おらはサワネだ。名前なんてひとつあれば十分だ」

少年は細い目を少し見開いた。

「真名だぞ。真の名を知れば、あんたは己の本当の姿がわかるようになる」

「おらはおらだ。サワネだ。真の名なんていらね」

「多くの修験が真の名を求めて、この山を、そしてこの大楓を訪れる。ところがさんざん彷徨ったあげくにも得られずに山を降りるやつらがほとんどさ。それを俺がわざわざ直々に教えてやると言ってるんだ。なのにあんた、本当にいいっていうのか？」

「いらねって言ったろ……」

「へえ……、おもしろい。気に入った」

そう言うと少年は再び目を細めてサワネを見つめる。

「……なあ、それよりいい加減おらを下に帰してくれ。お願いだ」
少年は腕を組んだ。

「あんた、この世のすべてのものの真の名を知りたくないか？」
少年の黒い瞳が、光を吸い込んで行く。あたりは突然暗闇に包まれた。くくく……、と少年は喉のおくを鳴らす。

「この世の真の名をすべて知れば、あらゆるものを意のままにできる……。生き物ならその生死まで意のままだ」

「そんなの、いらね。それより早くおらを帰してくれ」

「本当にいらぬのか？」

「いい。もういいから、おらを帰して」

サワネはだんだん半泣きになってきた。

「あんた、うつけどろう」

「うつけどなんでもいいから」

「よく考えてもみろ。なんでも意のままになるんだぞ」

「帰してよ……。ひつく……」

「この岩の真の名を知れば、下に降りる階段を穿つこともできる」

「ひつく……。かえして……。お願い……」

「俺の真の名を知れば、この俺だって意のままにできるんだぞ、あんた分かっているのか？」

サワネは涙を流しながら首を左右に振った。

「わかんない。何もいらぬ……。いらぬから……」

少年はすらりと腰の刀を抜いた。刀身は青紫の炎が包んでいる。ぐっと一歩近づくと、サワネのあごを片手で持ち上げたと炎の揺らめく刀を首筋に近づけた。熱さはない。むしろ、恐ろしいほどの冷たさを感じる。サワネはガタガタ震えながら少年を見上げた。

「逆らうな。俺の言葉を繰り返せ。分かったか」

サワネは涙を流し、うめくようにうなづくことしか出来ない。

「間違えるなよ」

震えながらサワネはうなずいた。

「いいか。『マナケンザン、スワハライ、スワウチケ……』」

「ま、まな、けんざん……」

口が思うように動かない。なみだがポロポロとこぼれた。ふと脳裏におぼの言葉がよみがえる。

『山にいる間は夜旅も避けるんだよ。今夜の満月は特に……』

余計に嗚咽が大きくなって、言葉につかえた。

「まじめにやれ。人は脆い、本当に少しのことですぐに死んでしま
う」

喉元に刀の刃が当てられた。ちりちりとした刺すような痛み。

「死にたくないだろ。繰り返すんだ。『マナケンザン、スワハライ

……』」

「まな……、ひっく……けんざん……すわ……はらい……ひっく」

涙でにじんだサワネの視界に、緑の光が映った。吹き上げられる
ようにして小さな珠がゆらゆらと、瞬きながらこちらに漂って来る。

「『……バサラ、ウン』」

「ばさら……、ひっく……うん……」

突然、頭帯がほどけ、するりと地に落ちた。サワネの黒髪が風に
煽られて広がる。

「よし。封が解けたな。そのまま目を閉じてろ。おまえの真の名を
……」

少年の口元には牙がのぞいている。瞳が底知れぬ闇に変わった。
その瞬間、さっきから漂っていた緑の珠が加速しながら近づいて
来た。

「……なんだ、こいつ？ 邪魔する気かっ」

少年が払いのけようとする、珠は意志でもあるかのようにふわ
りとその手を避け、サワネの額に当たった。衝撃はない。だが、目
の前が一面緑色に染まって何も見えなくなった。額の真ん中がむず
むずして、ほどけ落ちたはずの頭帯の感触を急に感じる。すうっと
青い香りが鼻の奥に広がると、緑の光りは少しずつ薄らいで、まぶ
たの裏に一本の木が映った。

緑色の新芽、そして小さく可憐な白い花。サワザクラの若木だっ
た。その木のまわりにもそよ風が吹いているようで、柔らかく若木
全体が波打つように揺れていた。枝が揺れるたび、花びらが散るよ
うに白い光がはらはらとこぼれてくる。

「しまった！」

少年がサワネの手首をつかんだ。その瞬間、まぶたに映る輝く枝

が小さく震える。

聞き取れないほどのかすかな声。

突然、サワネは白い光に包まれた。

第十回



「お目覚めなさい……お目覚めなさい」

ゆっくりと目を開ける。あたりは霞に包まれたような薄明かりが満ちていた。

白いゆったりとした絹衣をまとった背の高い女性がサワネの傍らに立っている。目が合うと女性は穏やかなほほ笑みを浮かべ、ゆっくりと腰をかがめた。額で銀の髪どめにおさえられた長い髪が、雨の後に木々からしたたる露のように輝いている。さまざまな色の光の珠を連ねた首飾りが胸元で揺れた。

「目覚めましたか」

女性の声を耳にした瞬間、サワネの全身が粟立った。大きな声ではない。むしろ、小さいくらいの声だった。だが胸にそのまま届いてくる。心の奥底を指先で直接、やさしく、撫でるよう。もっとその声を聞きたいと感じる心地よさと同時に、なぜかその場から逃げだしたいという相反する気持ちが浮かんできてくる。

女性は返事を待つかのように黙った。無言となった女性の存在感にサワネのからだは震え出しそうだった。

山で一番怖いのは、自分の心の影から生まれる恐怖にかられること。それさえ避ければ、あとの全ては山の神様次第。

サワネは山中で怪我をした時と同じように、目を閉じると大きく息を吐ききった。そのままゆっくりと息を吸う。そうして深呼吸を何度か繰り返した。徐々に気持ちが落ち着いて、震えが引いてきた。再びゆっくりと目を開くと、サワネは意を決した。

「……ここは、どこ？」

「ハザマの地です。地上とは時の流れが全く異なる、とても離れた

所になります」

薄明かりの中では、なにもかもがぼんやりとしていて、前も後ろもどうなっているか全くわからない。まるで水の中にでも浮かんでいるようだった。

「あんた、……だれ？」

「私は森の古き木の一つ、オオサクラ。人が住まう前からこの地にいたものです」

森にいくつもある古の巨木に宿るカミ、森の神様に違いなかった。なにかとてつもなく大きなものに触れた気がして、サワネは居住まいを正し、深々と頭を下げる。

「森の神様、失礼しました、石を投げたりしてすみません、許してくださいっ！」

「面をあげなさい」

肩に触れられ、サワネは素直に顔を上げた。

「あなたには、怖い思いをさせてしまいましたね。首元に刀など……」

少年の牙と闇の瞳、そして首元に突き付けられた刀の感触を思い出し、一瞬恐れが心に浮かんだ。深く息を吐くと、それはすうっと流れ去るように消えていく。

「とんでもないです、おらこそ申し訳ないです」

サワネが畏まって首を振ると、オオサクラはため息をついた。

「あの天狗、姉のオオカエデが配下のはずなのですが、あのような悪さをするとは思いませんでした」

「天狗、ですか？ おばばは鼻が長いと言っていましたか……」

「天狗にもいろいろいますからね。それにしても、人を脅して真の名を探り出そうとするなんて、いたずらにも程があります」

第十一回

サワネはもう一度大きく首を振った。

「かまいません。おら、平気です」

「あなたが思う以上に、大変なことなのですよ。姉に代わって謝らせてください。……お詫びに何かを差し上げようと思うのですが、望みのものはありますか。ただ、今の私には、必ずしもすべて沿えないかもしれない。それが悲しいところですが」

「いいえ、何もいらないます。その代りにどうぞ、おらをうちへお帰してください」

口元を袖で隠し、鈴の音が響くようにオオサクラは笑った。

「もちろん、お帰しします。でも、今の私でも与えられるものはいろいろとあるのですよ。本当に何もいらないますか？」

首を横に振る。

「なるほど……。あの天狗があなたの真の名を手に入れたと感じるのも、わかります」

オオサクラはサワネの手を取った。暖かい手に触れると、額の中心がむずむずして緑の光と鼻の奥の方には緑の香を感じた。はっと視線を上げるとオオサクラと目が合う。

「安心なさい。それは私とあなたの繋がり証です。あなたは必ずや無事にお帰ししましょう。今の私にもそれぐらいの力があります」
そういうとオオサクラは優しく微笑んだ。

「ありがとうございます」

サワネは頭を下げた。すると、額から全身を大きなものが包み込んでいく感触が広がっていく。暖かな日の光、心地よい風に包まれたように、心と体の内側から何かの力が湧き出て、サワネの全身を巡り始める。

「立てますか？」

「はい、なんとか」

さっきまで全く足に力が入らなかったのに、オオサクラが軽く手を引くとずっとサワネは立ち上がることができた。

「それではお帰しましうね」

そう言ったオオサクラだが、少し何かを考えるように、じっとサワネを見つめている。

「オオサクラ様、どうなされましたか？」

オオサクラはまぶたを閉じると、左右に首を振った。

「私も、実のところ、あの天狗と変わらないのかもしれませんが。すぐにお帰ししようと申し出ておきながら、どうしてもあなたを手放せない」

「どういうことですか？」

「……もしよければ、私の話を聞いていただけますか」

サワネは無言でうなずいた。

オオサクラはゆっくりと、輝くもやの中を歩き始める。一歩進むたびに清らかな鈴のような音があたりに響いた。足元へは桜の花びらがいくつも散っては雪が溶けるように消えてく。

「実は、古の木々に宿るカミがみな、お隠れになったのです。まったくお姿が見えず、いくら太古の言葉で語りかけても、届かない。私の姉、オオカエデもお姿が見えず、語らなくなりました」

「もしかして、オオカエデって、滝の中に生えていた大きな楓のことですか？」

「そうです」

「だったら、おら、この目でちゃんと見ました。葉っぱから光がいくつも空へ上がってました。あまりにもきれいで、びっくりしました」

「あなたが目にした木の姿は、私たちのような古の木々がもつ姿の片方にすぎません。本当の姿はその裏にあるのです。ところが、その姿が見えない。何より、問いかけに応じません。……太古の言葉が返ってこない。本来ならばその意味を、私が探らなければいけないのでしょうか。ところが、今の私にはそれができないのです」

そう言ってからサワネに向き直り、深々と頭を下げた。御簾のよ
うに黒髪がかかる。

「お願いがあります。助けてください」

第十二回

「何をなさるんですか、オオサクラさまっ！」

オオサクラに向かつて、サワネはほとんど泣くように叫んだ。

「おらになんか頭を下げねえでください！」

オオサクラは動かない。

「お顔を上げてください、オオサクラさま！　ね、上げてくれねえなら、おら、もう話を聞きませんよっ！」

驚きの表情を浮かべ、オオサクラは顔を上げた。切れ長の瞳は潤んで、今にも泣き崩れそうだった。

「すみません、オオサクラさま。ちゃんとお話は伺わせていただきます。でも、お願いですから、どうぞそのままお話ください」

うなずくとオオサクラは語り始めた。太古の言葉と、神々に深いつながりがあること。言葉が力を失いつつあること。その結果として、神々が語らなくなり、姿を失いつつあることを。

「……私も弱り、小さくなってしまいました。ハザマの地でしか、このような姿をとることができません。地上との繋がりもわずかになっています。このままだとじきに、私もただの物言わぬサワザクラになってしまうでしょう」

「それで、おら、どうすればいいんでしょうか」

「私にも分からないのです。でも、何かが動いているのは間違いありません。注意深くあれば、手掛かりに気付くことができるでしょう。どんなささいな事でも構いません。気づいたことがあれば私に知らせてください」

「どうやってお伝えすればいいんでしょうか？」

「私とあなたには繋がりがあります。心のうちで語りかけてください。きっと私に届くはずですよ。……このこと、お願いできますか」

「謹んで承らせていただきます」

サワネがそう答えると、オオサクラが再び深く頭を下げようとし

た。あわててサワネはとめた。

「おら、人の子ですよ。オオサクラさまは神様じゃないですか。オオサクラさまも、ほかの神様も、森の神様はおらたちにいろいろな恵みを下さいます。それだけでありがたいです。だから、いつでもなんでも命じてください。おら、一生懸命働かせていただきます」

サワネがほほ笑むとオオサクラは目許を袖で抑え、うつむいた。

「……私、どうも命じるということが苦手なの。姉からも、もっと毅然とするようにとしばしばお叱りを受けていたのですが、どうして、なかなか難しくくて。こんな泣き虫な神様では、幻滅してしまいますよね。何もできない、泣き虫な神では。ごめんなさい」

サワネは首を横に振った。

「ゲンメツって難しくてよく分かんないですけど……。おら、オオサクラさまのこと、大好きですよ」

びっくりしたように、オオサクラが顔を上げた。

「無理にそのようなこと、言わなくてもいいのですよ」

「いいえ、本当に好きです。……とくに、泣き虫なところが」

オオサクラは目を押さえて笑い泣きました。

「ありがとう。……人の子に励まされるなんて、これでは神様失格ですね」

「何をおっしゃいます。あのいやらしい天狗から、おらのことを助けてくれたでないですか。おら、オオサクラさまのためなら、なんでもどんとこい、です」

サワネは胸をこぶしで叩くと、白い歯をみせて笑う。

「ありがとう。……それではお願いします」

こぼれる涙の滴を拭きながら、オオサクラはサワネにほほ笑み返した。

「そういえば、あのいたずら天狗は野放しにしておくと、また悪さをしそうですね。……ああ、いいことを思いました。姉が戻るまで、あの天狗はあなたの配下としてしましましょう」

「えっ？」

「あの天狗、あれでなかなかの剣の使い手ですから、身の警護にもなりましょう。あなたに仕えさせておけば、他で悪さをする暇もなくなりますし。とてもよい考えではないかしら？」

「畏れながら、それはいいかかと……」

サワネが苦笑いを浮かべているのにも気づかないのか、オオサクラは満面の笑みを浮かべている。

「ただ、あの天狗には気合いで負けてはダメですよ」

「え、ええっ!？」

「それでは、これよりあなたを戻しますね」

そういうとオオサクラはサワネの額に触れた。あたりがどんどん白い光に包まれていく。

「私も見守ってます……お願いしますね」

「あつ、……はい」

サワネが答え終えないうちに、何もかもが再び白一色になった。

第十三回



「おい、起きろ」

驚いたサワネが目を開くと、少年が離れた岩から見下ろしていた。背後の闇に浮かぶ灰色の雲の合間には、だいぶ傾いた円い月がある。退屈そうにぼんやりとサワネを眺めている様子は、刀を抜いてサワネを脅した同じ少年、いや、天狗には見えなかった。

この天狗をサワネの配下にする、というオオサクラの言葉が思い出されたが、半信半疑な気持ちが増えかんでくる。でもその言葉に疑いをもつのは良くない、とサワネは思った。

『気合いで負けてはダメですよ』

サワネは腹に力を込め、天狗少年を睨みつける。

「やい天狗。……おらを帰せ」

「ああ、帰してやる。オオサクラからのお申し付けだからな。……それにしても、こんなガキの子守を命じられるとは」

天狗はわざとらしくため息をついた。

「子守ってなにさ。おまえ、おらの手下だろ？ その言い方はねえだろ」

「ふん。俺が仕えるのはオオカエデ、そしてその妹君であるオオサクラだけ。あんたの配下など、だれになるか」

「お仕えしてるなら、オオサクラ『さま』、オオカエデ『さま』つて、ちゃんと『さま』ぐらいつけろ！」

「いちいちうるさいな、人の子のくせに。……まあいい、とにかく下へ送ってやるよ」

天狗が近づくと、サワネは即座に手を引っ込めた。

「こら、おらの手に触るな」

その言葉に天狗はぽかんと口を開けたまましばらくサワネを見つめていた。

「おい、それじゃ運べないだろう？ あんた、本当にうつけたな」「うるさい、うるさい！ うつけ、うつけて言うな。……だったら、手を握らないでおらを運ぶ方法、おまえが考えろ」

天狗の顔には全く変化がない。だが、少なくともサワネには表情がみるみる不機嫌になったように見えた。もし眉間にしわを寄せるなどすれば顔形がくずれ、不機嫌さは一目瞭然になる。ところが、天狗はその端正な顔を一切歪ませることなく、相変わらず整った顔のまま、それでも己の『不機嫌』をあたりに撒き散らしていた。

しばらくにらみ合いが続く。きまりが悪くなったサワネが口を開こうとした瞬間、天狗がニヤリと笑ったように見えた。

「ようし、良い方法を思いついた」

言うが早いサワネの後ろにまわると腹のあたりを抱えて飛び立った。まるで木登りで足を滑らせ、枝に服が引っ掛かってぶら下がっているような気分。抱えられた脇腹のあたりがくすぐったい。

「触るなといったろ！」

「手に触るな、だったな」

「屁理屈ぬかすな！ 放せ、こら、放せっ！」

サワネは足をばたつかせる。

「あんた、救いようがないほどのうつけたな。放すとあんたは落ちる。この高さから落ちると間違いなく死んでしまう。オオサクラのご命令がある以上、あんたに死なれたら困るんだ。放すわけにはいかない」

「放せ！」

「いやだね。それより本当に暴れるのはやめてくれ、ようく足元を見ろ」

月に照らされた森の木々が、まるで苔のように小さく見える。ひゅうと風が頬を撫でた。サワネは足を動かすのを止め、からだの力を抜く。天狗がサワネを抱えなおした。まるで子猫が母猫に首元を

啞えられながら、だらりとぶら下がっているような気分になる。それでも、風と一緒に流されて行くようなつもりでいると、ゆらゆらと揺れながら宙を漂っているのもそう悪くない気がしてきた。

第十四回

サワネは首をひねると、天狗に声をかけた。

「なあ……おまえさ……名は……」

「どうした？ 気分でも悪くなったか？」

「いや。……なんでもねえ」

しばらく無言で風を切って進むと、今度は天狗が口を開いた。

「あんた、今、俺の名を聞こうとしてなかったか？」

「なんぞ。知りたくもない」

吐き捨てるようにサワネが言っても、天狗は「そうか」と呟いただけだった。

しばらくお互い無言で夜の空を漂う。そのうちサワネはきまりが悪くなってきた。

「……なあ、さっきはあんな言い方して悪かった。おまえの名が知りたい。教えてくれ」

天狗が笑ったように感じられる。

「俺もあんたごときにずっと『おまえ』呼ばわれされていると、気持ちがいいものではない」

上からサワネをのぞき込むと、天狗は耳元で呟いた。

「俺は『カヌヤ』だ」

「カヌヤ……」

「良い名だろ？ オオカエデが下さった」

「……それで、オオカエデさまはどうしている？」

「あんたも見ただろう？」

「違う、もう一つのお姿の方だ」

カヌヤは、ぽつりとつぶやいた。

「分らない」

夜風が二人を追い越していく。

「このところまったくお声がけない。まあ、俺は暇になるから、

その方がありがたいけどな。お陰でへんな子守が回ってきてしまった」

「おらのことガキみたいになうな！」

「ほんとのとこ、ガキだろ」

カヌヤはそう言って笑うと再び風を切って進み始めた。見えない風の壁が次々とぶつかってくるようで、息も止まりそうだと。

ふいにカヌヤはゆっくりと漂い始めた。呼吸が楽になる。気づくと光の粒を宙に放つ大楓と滝が眼下に見えていた。あくまで大楓の木は立派で、揺れるたびに放つ光りは力強く、神聖な印象を与えている。一見しただけでは、オオサクラが言うように、力が弱まっているとは全く感じられなかった。むしろ、今まで出会ったことない存在感、その秘められた力に圧倒される。

——でも、この姿は片方だけなんだ。

青々と葉を茂らせていた大樹が突然に傾^{かし}ぎ、倒木として朽ちていくのをサワネは森で何度か見てきた。そのような木は例外なく根が腐っていた。

木は、天と地の、両方へ伸び広がるもの。どちらかが駄目になれば、もう一方も倒れる。

オオカエデがお隠れになっている、ということは、滝つぼにそそり立つ大楓の木にも、遠からずなんらかの影響が現れる。輝く大楓を眺めていると、サワネは胸の奥の方でかすかな痛みを感じた。

カヌヤは少しずつ高度を下げた。大楓がだんだん近づいてくる。やがて滝つぼのほとりに降り立った。サワネの足にも草の感触が戻ってくる。

ところが、再び肝心の足に力が入らず、サワネは今度もへなへなと座り込んでしまった。

第十五回

「どうだ、少しはこうして空を舞うのも気に入ったか？」

「……まあ、思ったほど、悪くない」

サワネはカヌヤを見上げた。

「またすぐにでも舞うか？」

「とりあえず、もう、十分だ」

「気持ち良いのにな、もったいない。……どうもサワネは空が苦手と見える」

「おら、平気だ」

「それなら、立てるか？」

「もちろん……」

カヌヤの差し出す手を握ろうともせず、サワネは気合を入れ、立ち上がろうとした。ところが、まだ力が入らない。情けない格好のままぺたりと座り込んだサワネを見て、カヌヤが端正な顔を崩して笑った。

「はははっ。これはまさに、文字通りの腰抜けだな」

「みっ、見るなっ！」

サワネはとっさに叫んだ。カヌヤの前で無力な姿をさらしている自分が耐えられない。心臓が早鐘のように鳴っている。全身が、かあっと熱くなってきた。

落ち着かないと、思ってもカヌヤの笑い顔を見ると、ますます混乱してきた。

「ははは……。本当に見てられないな」

そう言うとカヌヤはサワネの手を取った。

「何をする！」

「ふふっ。腰抜け娘を運んでやる」

そのままカヌヤはくるっと背を向け、まるで投げ飛ばすかのようにサワネの腕を引く。気がつくともサワネはカヌヤに背負われていた。

「降ろせっ！」

カヌヤは答えず、サワネを背負ったまま駆け出した。

まるで嵐のようにごうごうと耳元で風が鳴って、滝の水音がどんどん遠ざかっていく。黒い木々の枝が目の前に急に現れたかと思うと、次の瞬間には別の巨木が次々と目に飛び込んできた。新しい木に気を巡らす間もなく、それもはるか背後になっている。空を舞うハヤブサより早く満月が追いかけてきた。カヌヤの足元では下草が煽られたように揺れる。まさに季節外れに吹き荒れる春の野分け風に乗っているかのようだった。

不意にカヌヤが立ち止まった。

柔らかな草の上に降ろされる。ふと視線を動かすと、斜めになった石が月明かりに浮かんで見えた。蛇と女神、太陽に月の浮き彫り。タガシ村の入り口を示す境石だった。

「俺はここから先、行かない方がいい。村人に見つかるやつかいだ。悪いが降りてくれ」

空から降りてきた時ほどではないが、やはり足からずとんと力が抜けてしまいそうだった。

『気合で負けてはいけない』

睨みつけるようにして背を反らし、頬を膨らませる。

「ご、ご苦労」

息が止まって、顔が真っ赤になってくる。

「何をしてるんだ？ まったくおもしろいな、あんたは……」

サワネに背を向けると、山の方へカヌヤはゆっくりと歩き始めた。

「お、おい」

「なんだ？」

足を止め、カヌヤは首だけ軽く振り返った。

「……ありがとう」

カヌヤの口元にかすかな笑みが浮かぶ。

「何かあったら呼べ。じゃあな」

その姿は、少しずつ森の中へと融けていった。

第十六回



月が沈んで行く。反対に東の空には明星が力強く輝き、山際がすすかに白んできた。もやのかかったタガシ村に降りると、サワネは真つすぐおばばの家に向かった。

戸を叩くと程なくおばばが顔をのぞかせる。

「サワネか！ 夜旅はすると言うたにっ！」

「心配かけて悪かった」

「まったく……」

「それよりおばば。あの人はどうなった？」

「しいっ！」

顔をしかめ、おばばは口元を一本指で抑える。サワネはあわてて口をふさいだ。おばばの二つの眼が油断なくあたりを見回す。

「……おいで」

軽く手招きしてから中に入って行くおばばにサワネも続いた。ロウソクを手に、ゆっくりと丸太階段を上って行く。駆け出したいのを抑えながらサワネはその後ろに続いた。

縄梯子の上では、額を布で巻かれた男が横になっていた。

「見ての通りじゃ」

目を閉じ、微動だにしない。

おそろおそろ手を伸ばそうとするサワネに、おばばは目くばせした。

男の手に触れる。ひんやりとした冷たさとあたたかな温もりが入り混じっている。どうやら熱冷ましが効いて容体は落ち着いているようだった。よく見ると、胸のあたりも深くゆっくりとした呼吸に合わせ、わずかに上下している。息を止めていたサワネの口から声

が漏れた。

「よかった……」

「まったく、運の強い男よ。ほどなく目も覚ますじゃろうて」

「やっぱり山の神様が助けてくれたんだな」

「そうかも知れんの」

「山に行ったら、山刀もこの人の鎧も、みんななくなってた。それで分かったんだ、山の神様がお供えとして受け取って下さったんだって。代わりに命は助けてくれるんじゃないかって」

「なくなっていた、とな。おまえさんの背負子や山刀もか？」
サワネはうなずいた。

「誰かが盗みに来たんじゃない？」

「でも、まわりに足跡も何もないんだもの」

「そりゃ妙だの……」

おぼばは呟きながら闇を見つめた。

「あれ？　もしかして……」

「何か心当たりでもあるか？」

「いや……。気のせいだと思う」

第十七回

言いよどむサワネを疑わしげに見つめながらも、おばばはそのまま黙っていた。

「でも、背負子は作り直せるから大丈夫。山刀はおらひとりじゃどうにもならないから、ちよつと困るけど」

おばばは目を細め、サワネを見た。

「ならば、ヨヘイにでも作らせればええじゃろ。ヤツめおぬしにホの字じゃで、山刀の一本や二本ぐらいおやじさんのところで作ってくれるぞ、きつと」

「やめてよっ！」

サワネが頬を膨らませるのを笑いながら眺めている。

「さてと、朝餉あさけの用意でもしようかの。サワネ、この青二才を見ていてくれるか？」

「任せて」

だが、おばばは縄梯子に足をかけようとしてそのまま止まってしまった。

「……のう、サワネ。魔除けの頭帯はどうした？」

「あ。忘れてきた」

「どこでぞ？」

「岩の上で外されて、落ちたのを拾い忘れてた。それどころじゃなかったから」

「誰にじゃ？ 誰に外された？ うん？」

いつになく強い調子でおばばが聞く。

「……天狗」

「なに、天狗じゃと？」

おばばは縄梯子から手を放し、サワネに近付いた。

「他に……何かされなかったか？」

サワネは首を左右に振った。

「どれ、ちょっと見せてみい」

おばばがそつと額に手をのばす。サワネは目を閉じた。特に見た目に変わりはなく、おばばは手を引いた。

一方のサワネは、目をつむったまま笑い出しそうになるのを必死でこらえていた。おばばが額をかすかに触れるか触れないかのぎりぎりですつと撫でていく。それも、何度も何度も。眉間から額にかけて、内側で何かがうずくような、くすぐったいような、へんな気持ちになってきていた。

「なあ、おばば。くすぐったいよ。もうやめてくれ」

「触れてないぞ」

「えっ……？」

サワネが目を見開くと、おばばの両の手はサワネの目の前にある。それでも触れられたような額のかすかなうずきは続いていた。

「なあ、おばば、どうなってるんだ？　へんな感じがする。ねえ！」

その感覚はどんどん強くなってきた。

サワネの頭の内側で、何かがうごめいている。暴れている。額を食い破って出ようともがいている。内側から外に向かってしびれるような感触が広がり始めた。

第十八回

「なんだか虫がいるみたい。頭の中に虫がいるよっ」

「サワネっ、落ち着け！ 本当に天狗に何もされてないか？」

サワネは大きく首を振った。

「なら心配することは何もない」

「でも、でも……」

皺だらけのおばばの手がサワネの手を優しく包み込む。

「ほれ、息を大きく吐くんじゃ。全部吐き切れ……。それからゆっくり吸う。ゆっくり、ゆっくり……」

おばばの声にあわせ、深く息をするとだんだんサワネは落ち着きを取り戻してきた。

ふと気づくと、鼻の奥には清らかで澄んだ水と深い緑の香りがある。額にはまだ何かの感触があった。だが、額から体全体へと広がるかすかな振動には揺れる木々の葉擦れを感じた。守られている。そんな安心感がサワネを包んでいく。あれほど恐ろしかったうごめくような感覚は、全身を巡る心地よい波へと変わっていた。

「おばば、ありがとう。……もう大丈夫だ」

「どうした、サワネ。あんなに取り乱して。お前さんらしくもない」

「何かが動いたんだ、おらの額の裏で。……きつと、オオサクラさまのおしるしだ」

「オオサクラ、じゃと？」

目を大きく見開いたおばばにサワネはうなずき返した。

「……実はおら、森の中でオオサクラさまにお会いしたんだ。なんて言っただけかな、ハザマとかいう、霧がかかったところだったと思う」

おばばは、ゆっくりとサワネから手を引いた。しゃがんだまま全身を震わせている。

「どうした？ おばば、大丈夫か？」

「ああ、……ああ。心配いらん」

そう呟くおばばの唇は、小刻みに震えていた。

「気付けの葉がいるか？」

「心配するな。じゃが、ちょっとな……。サワネ、悪いが下に降りしてくれ。腰が抜けた」

サワネは隅に置かれていた帯を手にした。たすきにかけると、おばばを背負う。細く骨張った脚、しなびてかさついた肌が手に触れた。

「瘦せたな、おばば」

「言うことも聞かず、夜旅をして戻ってくるような輩と付き合つてれば、やつれない方が不思議だや。それも天狗やオオサクラさまにお会いしたなど……」

背中越しに溜息を感じる。サワネはギュッと帯を絞った。

「ちよっときついぞ、サワネ」

「おばばが落ちたら困る」

「ふん。口うるさいババアなど、さっさとくたばった方がええと思うとることぐらいお見通しじゃで。見え透いたウソを言うな」

サワネは苦笑いを浮かべるとロウソクを咥え、縄梯子を降り始めた。強がり、軽口を叩いて、一旦は平気そうに見えたおばばは、囲炉裏端に降ろされるとまた震えはじめた。

第十九回

「サワネ、天狗はお前に何をした？」

「おらに、真の名を教えてやると言っただ。でも、おら、いらねって言ったら、刀を抜いて変な言葉を繰り返すように脅したんだ」

「その時、頭帯が落ちたのか」

「うん。そしたら緑の光る珠がおらの頭にばあって飛んできて、当たったんだ。それで……」

「もうええ。それ以上は言うな。もう十分じゃ。よく分かった」

「おばば、実は……」

「それ以上語るな。カミとの繋がり大切なもの。軽々しく口にしてはならん」

「おばばにもか？」

「そうだでに。語ってよいのは、カミが他のものにも語れと、自らお示しになったときだけ」

「そしたら、おら、これからどうすれば良い？ さっきも変な気持ちになって、おばばがいなけりやどうなったかもわかんない……」

サワネの目が潤んだ。

「おら、こわい。神様とか、天狗とか、大きな森の木とか……。知らないものばかりだ。なあ、おら、どうすればいい？」

おばばはゆっくりとサワネに手を差し伸べた。

「サワネ、おばばもお前さんを助きたい。だがの、人にはそれぞれ役目がある。役目は与えられたものにしかなすことができる。何をなすか、なさぬかは、お前さんが決めなければならんことじゃ。だから、いくら頑張っても、おばばに手助けできることは限りがある。特にカミがからんどるとな……」

じっとサワネの目を見つめている。

「サワネ、今も何かを感じるといふことは、お前さんにはハザマの地を抜けても、強い力が流れ込んできている。お前さんとカミとの

繋がりはそのほどのものじゃ。与えられたお役目は大きいぞ」

「そんな、おら、ただオオサクラさまがお困りのようだったから、それでつい……」

「お前さんにその心があったからこそ、オオサクラ様もお役目をお与え下さったんじゃないで。つい、とは言うが、お前さんの心はそれを受けける用意が整った、ということだで」

かさかさで皺だらけの手が、サワネの小さな手をとん、とん、と優しく叩いた。

「サワネ。お前さんしかこのお役目は為せん。そしてお前さんなら立派に果たせるはず。安心せい、オオサクラ様の助けと導きがきつとある」

「でも、こわいんだ。オオサクラさまのお印も、ハザマではもっと気持ち良かったのに、ここでは虫がいるみたいで」

「それはの、サワネ。ここがハザマの地と違うからだの」

「おばばの家ではだめということか」

顔をくちゃくちゃにしておばばは笑う。

「そうじゃない、カミガミの地やハザマの地と、この地は違う、そういうことじゃ」

第二十回

「分からない。どういうこと？」

「ふむ。悪いがちよつと水を汲んできてくれんか」

立ち上がり、土間に降りる。瓶の蓋をどけて、椀に水を汲むと囲炉裏端に戻った。

「一口飲んでみ」

冷えた水がすつと喉を通り胃に染み渡った。

「澄んでおるじゃろ？」

「飲み水だもの」

「そうじゃ。うまいだろ。だがの、こうするとどうかの？」

おぼばは囲炉裏の灰を一掴み、椀に入れた。

「これを飲むの？」

「同じ水であることに変わりはないだろう？」

「そりゃそうだけど……」

「カミとのつながりも同じようなものじゃで。少しでも濁りがあると、清い水も口がつけらんものになってしまう。それはお前さんの心、ひとつ。……のお、サワネ。お前さんはオオサクラ様が好きか？」

サワネは首を大きく縦に振った。

「好き。おら、オオサクラさまは大好きだ」

「なら、オオサクラさまとの繋がりをそのまま受け入れるんじゃ。

ただ、ありのままを見留め、余計なことは考えるな。濁りに、惑わされるだけだからの」

しばらく思案してからつぶやいた。

「……分かった」

「心を清く、そして強くもて」

「うん」

「……さ、そしたらこれ以上は語らせんでくれ。あまりにも畏れ多

いことだでな」

「もっと教えてくれないの？」

「まだカミガミを語るに、おばばは若すぎる。もっと年寄りになったら、教えてやれるかも知れん」

「それじゃいつになるか分からないよ」

声を立てないおばばの笑いが指先から伝わってくる。じっと握り締めてくれているその手をサワネは見つめた。

「ありがとう、おばば」

顔を上げると、穏やかなほほ笑みがあつた。

「……それにしても今朝は冷えるの。サワネ、悪いが火を大きくしてくれ。歳をとると鼻水が出て困る」

おばばはそういうと、わざわざぶるっと全身を震わせてみせた。

囲炉裏の灰から火種を拾い出して、サワネは火口を近づけた。ひと吹き、ふた吹きで煙が上がり、小さな炎が揺らぎ始める。

おばばが鼻をすすする音がかすかに聞こえた。

「奥から木綿の上っ張り。……取ってこようか？」

「いや、いらんよ、いらん。ちよいと暖まったらすぐに用意を始めるさ」

その時、物音がした。おばばは上の方を見上げる。

「おや、どうやらあの青二才め、目を覚ましおったな。朝餉に合わせ起きて出すなど、相当の食わせもんかもしれんぞ」

そう言っておばばは笑う。

「サワネ、様子を見に行くぞ」

「うん！」

サワネは撥ねるように丸木階段を駆け上がった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4343e/>

桜楓姫譚《おうふうきたん》

2011年5月8日23時47分発行